ピューリタニズムの軌跡

—John Winthrop（1588-1649）；『キリスト教徒の経験』—

岡本　雅夫
倉敷芸術科学大学教養学部

（1996年9月30日　受理）

1．はじめに

ニューイングランドの初期植民地時代にピューリタンが残している，いわゆるPuritan Literatureには幾つかのジャンルの書き物があるが，その中には，当然ながら，説教，日記，書簡，裁判の記録，宗教的な小冊子などがある。これらは文学作品というよりはむしろ，植民地時代の事情，特にピューリタン信仰のさまざまな様相を知る上で不可欠の資料となっている。『しかしながら，ピューリタンが書いた想像力豊かな作品や，宗教的，政治的論文で明らかなように，文学的才能を持ったピューリタンは多い。植民地時代の最初の三十年の間に，ピューリタン文学に主として名前を残しているのは，教会と国家という困難な問題に取り組んだ指導者たちである。William Bladford, John Winthrop, John Cotton, Roger Williams, Thomas Hooker, Thomas Shepard，そしてAnne Hutchisonである。』[1)]

小論では，ウィンスロップが書き残した記録のなかで，移住の理由を明らかにしているReason To Be Considered for Justifying the Undertakers of The Intended Plantation in New EnglandとA Model of Christian Moralityを，The Puritans in America —A Narrative Anthologyから取り上げて読み，Christian ExperienceをWinthrop Papersの中から読むことにする。

2．ウィンスロップの宗教的背景

ウィンスロップを読む上で基本的に理解すべきことは，ピューリタン神学の基本的傾向は宗教改革の教理を，契約の理念によって個人または公共の宗教的要求に応えるものであるということ，そして特に英国のピューリタンに顕著に影響を与えた神学者は，ジョン・カルビン（John Calvin）であったということである。英国の神学者，John Preston, Richard Sibbes, William Ames 等はカルビンを修正したり，会衆主義（congregationalism）の教義を規定したりしたが，カルビンのInstitutes of the Christian Religion（1536）の五つの教義がその基礎になっている。---（1）全体的堕落（total deparavity），原罪が原因する人類の完全な堕落。（2）無条件の選び（unconditional election），神が予定運命として定めた救済あるいは断罪。（3）限定されたキリストの贖罪（limited Atonement），キリストの死による命の賜物は，天へ上がるべく運命づけられている人間に限られる。（4）不可抗力の恩恵（irresistible grace），回心に不可欠であるが，

働きによって得ることもできないし，拒否もできない。（5）聖徒の堅忍（perseverance of the saints），回心者の忍耐強い義認と正当性。回心の経験と，教会員の資格が与えるように思われる確信にもかかわらず，全てのピューリタンは，自己妄想の可能性が強いこと，そして，最も強い確信を抱いている聖徒といえども，絶えず自己欺瞞，罪，そして偽善を示すものがありはしないかと自分の心を探るべきであることを理解していた。』[2)]

ウィンスロップは，十四歳で，Cambridge のTrinity Collegeへ入るが，ここでピューリタン神学を学んだと思われる。（“Christian Experience” のなかで述べているように，一時は，聖職者の道を選ぼうとしていた）Erasumusが在職したことのあるCambridge には宗教改革の精神が満ちていた。当時 William Perkins （1588-1602），John Preston（1587-1628）という同時代のピューリタン神学者が在籍していたし，ニューイングランドにおけるピューリタン神学に永続的な影響を与えたとされる William Ames（1587-1628）が在職していた。ウィンスロップの在学期間は二年ほどであったが，その影響の深さは，その後のウィンスロップの全生涯の言動が証明している。

3．ニューイングランドへの移住

父親Adam Winthropから受け継いだ，ヘンリー八世から買い求めたという由緒ある富裕な農園を手放し，法律家としての仕事を捨て，新大陸へ移住する決意を固めた時に，ウィンスロップは何を考えていたのか，何に駆り立てられたのかという疑問が生じる。1628-1630年のウィンスロップの書簡から分かることは，友人だけでなく，血縁の人達は「もし英国の道徳的退廃が，ウィンスロップの言うように重大なものであるなら，一握りのピューリタンの聖徒たちと英国を捨てることをどう弁解できるのか」という疑問を示したのである。ウィンスロップは，マサチュウセッツ湾会社に対して向けられた異議に対して体系的な答えを，1628年から1629年にかけての冬に書き上げている。

The Massachusetts Historical Society, Proceedings 8（1864-65），420-425から，The Reasons To Be Consideredを読んでみることにする。

『ニューイングランドへの入植計画を企てること，及び神によってこの計画に参加しようと心を動かされる人達を勇気づけると考えられる理由』[3)]（以下抄訳）

『1．かなたの地に神の福音を広め，反キリスト王国に対する砦を築くこと。

2．ヨーロッパの他教会は，全て荒廃している，そして我々の罪は，既に神が不快を示していられるが，我々に対する恐ろしいほどの脅威となっている。神が，この地（新大陸）を，人間全体に及ぶ災難から救おうとされる人間の避難所として用意されたことを知らない者はいない。・・・

3．この土地（英国）は，その住民にうんざりしている。全ての創造物のなかで最も貴重な人間が，足で踏みしめている地面よりも不道徳で卑劣であり，馬や羊よりも値打ちがない。・・・（1589年の法律によって，一家族を養う最小限とされた4エイカー以下の土地には，

家を建ててはならないとされた）法律によって，子供，召使い，隣人（もし彼らが貧しければ）が最大の重荷になっている。

4．全ての土地は，神の庭園（Lord's garden）であり，神が人間の子孫に与えたものである。[Genesis 1:28] この目的は，道徳的であり，自然でもある，つまり，人間が大地の果実を享受し，神が人間（creatures）から，当然の栄光を受けることにある。それなのに，何故，この国にいる我々が，住む土地を手に入れるのにせめぎ合いをしなければならないのか。外国では，我々が，１，２エイカーの土地を手に入れると同じ労力と費用で，同程度かましな土地を何百エイカーも手に入れることができるだろう。広大な大陸が，我々の土地と同じ程に便利で有用であるのに，何の改善をも加えないで，荒れたままにしておくのはどういう理由であろうか？

5．我々は，過度の放縦に陥り，不節制の極みにある・・・善良で正しい人間が，自分の責任を果たし，自分の職業で気持ちよく暮らすことは不可能である。

6．学問と宗教の源泉が腐敗している。殆どの子供達は，悪の道に導かれ，堕落し，多くの神学校の放縦な管理による数多くの邪悪な手本によって破壊されている。

7．今幼児時期にある格別な教会を起こし支えること程良い仕事で，名誉あるキリスト教徒に相応しい仕事があり得ようか。

8．もし敬虔で，豊かで繁栄した暮らしをしている人が，それらすべてを捨てて，この教会に加わり，厳しく，みすぼらしい状態で生きる危険を冒そうとするなら，冒険者に投げつけられる世間的な，悪意のある中傷を取り除き，神の民が祈りのうちに移住することへの信頼により大いなる命を与え，他の人たちに更に進んでこれに加わることを奨励するであろう。

9．神が，神の賢明にして忠実な多くの僕たち（牧師とその他の者）の心を動かし，彼らがこの企てに賛成したばかりか，関心を抱いていることは，神の教会の幸福のための神の働きの一つと思われる。』

これらの理由に続いて，移住に反対する意見（Objection）とそれに対する答え（Answer）が記されているが，その要約は次のようである。

『反対１：我々は，他人によって長期にわたって所有されている土地へ入る正当な理由（warrant）を持たないではないか。

答え1：全ての人間に共同のもので，誰もそこに居ないし，耕されてもいない土地は，そこを所有して，良くしようとするものであれば，誰にでも自由に手に入れることができる土地である，何故なら，神が人間の子たちに，その土地に対する二重の権利を与えているからである，つまり，自然権と，公民権（所有権）である（a natural right and a civil right)。自然権は，人間が共同の土地を持ち，全ての人間が好むところに種を蒔き，牧草地として使用する時に生じた。やがて，人間や家畜が増えていくと，彼らは，土地を囲うことによって，ある部分の土地を自分の専用にする，この事がやがて彼らに公民権を与えたのである。それは，アブラハムも許可なしには死人を埋葬することができなかった，ヘテ人のエフロンが，マクペラの土地に持っていた権利である。[Genesis49-30] ニューイングランドの原住民は，土地を囲んでもいない，固

定した住居も持たない，また土地を改良するための家畜もいない。だから，彼らは，自然権以外には何の権利もない。したがって，もし彼らが，使用するに十分な土地を残しておけば，我々は合法的にあとの土地を手に入れることができるのである。彼らと我々にとって，十分以上の土地が有るのである。

答え２：我々は，原住民の善意の許可を得られるであろう，というのは，既に彼らは，我々英国人が近くに住むことで利益を得ている，そして我々から，ある程度の土地を今迄よりも一層良くして有効に使用する事を学び，やがて全体をそうすることができるであろう。この手段によって，我々は，価値ある手掛かりが得られる，というのは，彼らは我々から，我々が彼らから得る全ての土地から得るよりも大きな利益を生むものを手に入れるからである。

答え３：神は，大規模な伝染病によって，原住民を消滅された，それ故に，残されている原住民はわずかである。』

『反対２：良き人たちを連れ去ることは我々の教会に対して，間違ったことをすることである，そして，我々は，それを我々が恐れる神の審判に委ねるべきである。

答え１：良き人たちが国を離れることは，神の審判を引き起こすのではなくて，それを予兆するのであり，神の審判は，それを防ぐために悪の道に背を向けたり，それから逃れようとして別の道を進んだりする残る人たちに起こるかも知れないのである。

答え２：この国を出て行く人たちは，留まる人たちについて何の意見も持たないのである。そして彼らは，彼の土地で，ここでよりも，より良き事ができると思われる。キリストの時代に，教会は国の区別なしに普遍的であった。だから，いかなる土地であれ良きことをする者は，全体的統一という見方では，全ての教会に奉仕するのである。』

『反対３：我々は，長きにわたって，神の審判を恐れてきた，しかしながら，我々は現在無事である。それゆえ，審判が訪れるまでこの国に留まる方が良いのではないのか。審判の時に逃げることもできるし，もし審判が襲いかかれば，我々の教会と共に，苦しみに甘んじてもよいではないか。

答え：そのような考えで，ヨーロッパ大陸の，パラティネイトやロシェールの教会（the churches beyond the seas as Palatinate and Rochelle, &c.）は，敵に攻められても留まって，見つけられたかも知れない避難場所を捜すこともしなかったように思われる。それらの教会の廃墟の悲しい光景は，我々にこれまでにない知恵を与えてくれる，つまり，災難が予見される時はそれを避け，襲われるまで，彼らのように留まらないことである。』

『この書簡は，移住を促進した者と，ピューリタンの移住という考えに反対する者との対話の記録である。しかし同時に，これは，ウィンスロップの心中で論争があったという証明であり，同時に新大陸へウィンスロップが携えた心理的負担の一部であるだけでなく，差し迫った航海に対して自分の良心を清らかにする努力であったとも読めるに違いない。』[4)]この書簡は，ウィンスロップだけでなく，当時の英国のピューリタンや同調者達の，キリスト教思想を現実的に表現していると考えられる。ピューリタンは，聖書の言葉は文字通り全ての真理を含み，

堕落した人間の理性は頼りにならないと信じていた。そして，英国教会は，人間の腐敗に盲目であり，キリストの法（Christ's Law）に無知であることを信じていたのである。新大陸への移住には，神の福音を広める，（ピューリタンの）特別な教会を建てる，堕落し，荒廃した教会から離れる，神の審判から逃れるといった宗教的理由と，人口や家畜の増加，それに伴う土地所有問題，課税等といった社会的，経済的な現実の問題が理由となっていることは一読して判ることである。更に，原住民が既に居住している大陸へ移住することに対する態度は，後に，英国王の勅許状は不法であり，土地は原住民の所有物であることを主張するRoger Williamsと対立することになるが，これらの移住の理由の全てが，聖書に示されている真理に基づくものとして正当化され，ニューイングランドへの移住の宗教的，現実的根拠になっていることが判るのである。

4．キリスト教徒の愛の模範（A Model of Christian Charity）

マサチュウセッツ湾への最初の移民は，Dochester Adventurersという名称によって英国商人の会社が，the Council of New Englandから特許状を得て財政的な援助をした漁師たちによって企てられた。漁業が利益を上げないと判ると，その特許状は，ニューイングランド会社へ移譲されるが，この会社は，チャールズ一世から，マサチュウセッツ湾会社を設立し，植民地を設立することができる特許状を手に入れ，移民の目的として，漁業以外のこと，つまり，英国教会に服従しようとしないピューリタンが，迫害から逃れ，新しい生活を切り開く植民地を作ることを構想していたのである。この商人達の内のピューリタンは，1629年の夏，ケンブリッジに集まり集団で移住する事を約束し，他の投資家から株を買い取ると，英本国とつながりのない独立した会社によって，植民地を経営することができるようになったのである。1630年の３月29日，四人の候補者から選ばれて総督に就任したウィンスロップは，アーベラ号に乗り組み，最初の４隻が，400人のピューリタンを乗せて出帆するのであるが､その年のうちに，更に600人が船出している。そして1630年代の大移住（Great Migration）の間に，一万五千人から二万人もの英国人がマサチュウセッツへ向かったのである。渡航の費用がかさむ事から，これら初期の移住者は豊かで地位のある人たちで，年季奉公人（indentures）や，アフリカ人の奴隷を持ち家族単位であった。ボストンで，ウィンスロップは同僚たちと行政と教会に関する秩序を打ち立てる必要があるという確信を共有していた。特に彼等は，ピューリタニズムという大きな運動の中で，自意識の強い，お互いに緊密に結ばれた人達であったが，一方では，英国教会は改革できるかもしれないと思いつつ，当座の間は迫害を逃れて，異郷の地にあるが，やがて，いかにすれば模範となる会衆主義者の共同体を創りあげることができるかということを，英国の仲間たちに示す機会を求めていたのである。実際，多くの者は，新大陸の滞在は一時的と思っていたし，1640年代の初め頃のピューリタン革命の時には，何百人もが帰国したのである。

1630年の春，ウィンスロップは，いまだ海上にあるアーベラ号で，同行する人達を前にして，自らも一信徒の身でありながら，神聖共同体が，“law of gospel”に基づいて建設されるべきこ

とを説教したのである。『キリスト教徒の愛の模範』(A Model of Christian Charity) と題されるこの説教と彼のJournalは，The History of New England from 1630-1649として，1825-6年に出版されている。

ピューリタンがニューイングランドに築く神聖共同体の理想的構想と，自らのキリスト教信仰に基づく確固たる信念を表明するこの説教は，キリスト教徒の模範となる理想郷が地上に実現するための精神的基盤であって，ウィンスロップの内面に培われていた聖書を核とする精神的エネルギーが，発現されたものと言うべきであろう。以下，抄訳『・・・』して，その概要を読んでみることにする。

『キリスト教徒の愛の模範』[5)]は，『一つの模範』(A Model Hereof) という短い頭首部分と『その理由』(The Reason Hereof) という本体から構成されているが，注目すべきは冒頭で，ウィンスロップが，人間の条件は，社会的不平等が自然なものとして，神聖にして賢明な神の摂理によって定まっていると宣言するところである。『全能の神は，その最も神聖にして賢明な摂理によって，人類の条件を定められたのである。あらゆる時代に，ある者は豊かで，ある者は貧しく，ある者は高く秀でた権力と威厳を持ち，ある者は身分低く，従属的地位にいなければならない。』

1620年代の英国の不況によって，次第に地主階級がその生活の格式と質を維持することが難しくなっていく中で，新大陸に資本を投じて，古き良き時代の階級社会の実現を神の摂理に結びつけて宣言しているとも読めるのであるが，現代からすれば，いかにも非民主的であり，非人権主義的と言わざるを得ない。しかし，次第に悪化していく社会秩序や道徳的退廃を経験して，英国の法の伝統，政治形態，社会的伝統のいわば復活を植民地に求めたという外ないのであるが，それも，次の『理由』に目を通せば分かるように，聖書に基盤を置いた，敬虔にして勤勉な聖徒の共同体からなる新しい英国の建設を目指したのである。『その理由』の中で，ウィンスロップは，神聖共同体についての神の計画は，公正にして秩序あるものであり，神の民が福音に示された戒律 (the rules of the Gospel) を心に留めるならば，完璧な仕事をされるであろうと説いている。

『・・・全ての者は，他の者を必要とする，それ故に，全ての者は，兄弟のような愛情の絆によってより一層緊密に結ばれるであろう・・・全ての者は，かくして，神の摂理によって，二種類に分類される，富める者と貧しい者である。前者は，順当に改善された収入によって気持ちよく暮らすことができる者であり，この配分によって生きる他の者は全て貧しい者である。・・・

我々がお互いに協調するための二つの法がある，正義と慈愛 (justice and mercy) である。・・・そしてまた同様に，これらの法について語る時，守るべき二重の法がある：それは，自然の法と恩恵の法，或は，道徳の法，則ち，福音の法である (the law of nature and the law of grace, or the moral law or the law of the gospel)。・・・

これらの法の最初の法によって，人間は「汝自身のごとくに，汝の隣人を愛せよ」と命じら

れている（man is so commanded to love his neighbor as himself. Matthew 5:43)。人間関係に係る道徳についての法の全ての戒律（all the precepts of the moral law）はこの命令に基づいている。』

続いて，自然の法，恩恵の法，福音の法について，聖書の個所を引きながら解説し，愛の義務（duty of mercy）には，与える（giving)，貸す（lending)，許す（forgiving）という三種類があることを説明し，聖書が示している愛の定義についてこう述べている。

『愛は完全をもたらす絆である（Love is the bond of perfection)。第一に愛は靭帯（ligament）であり，第二に，それが働き（work）を完全にする。』人間の身体は，各部分が一つに結びついて完全な働きができることを例に挙げ，こうした部分が一つの体を成すものの最も完璧なものとして，Ephesians 4:16を引用してキリストとその教会を挙げる。『「キリストによって，体全体は，一つ一つの部分がその力量に相応しく働く力により，また，備えられたあらゆる結び目によって，しっかりと組み合わされ，結び合わされ，成長して，愛のうちに建てられるのです」この結び付けるものは，キリスト，即ちキリストの愛である。何故なら，キリストは，愛だからである。Ⅰ John 4:8』従って，『愛は完全をもたらす絆である』という定義は正しいとして，次のように結ぶ。『先ず真のキリスト教徒は，キリストにおいて，一体である。(Ⅰ Corinthians 12:22, 27 Ye are the body of Christ and members of their part.）第二に，この体を結び合わせている靭帯は，愛である。第三に，適切な靭帯を持たない体は，完全ではない。第四に，このように結び合わされる体の全ての部分は，特別な関係によって隣接しているので，各部分の強さ，弱さ，喜びや悲しみ，幸せや不幸を共にしなければならない。Ⅰ Corinthians 12:26,「もし一つの部分が苦しめば，全ての部分が共に苦しみ，もし一つの部分が，尊ばれれば，全ての部分が喜ぶのです」(If one member suffers, all suffer with it; if one be in honor, all rejoice with it.）第五に，このように，お互いの状態に対する思慮（sensibleness）と同情（sympathy）は，必然的に各部分に，他の部分を強め，守り，保持し，慰めようとする生来の欲望や努力を浸透させていくであろう。』次に考慮すべきこととして，如何にして，愛が働くようになるかを述べるが，ここでは，Ⅰ John 4:7「愛は神から出ているのです。愛のある者はみな神から生まれ，神を知っています」(Love cometh of God and everyone that love is born of God）を引用して，このような愛は，再生した（the new birth）者の持つ果実であり，再生した者（神を知る者）しか持ち得ないが，この愛は，干からびた骨の上に働く主の霊の様なものである［Ezekiel 37］と説いて，この愛が，人間を再び生きた魂のある者にすると結ぶ。更に考慮すべきこととして，この愛の働きの二重性，内面的と外面的働きについて述べるが，これらの考慮すべきことから二つ目の結論を導き出す。

『第一に，キリスト教徒の間の愛は，現実のものであって，想像上のものではない。第二に，この愛は，人間の肉体の筋肉や靭帯が，その肉体の存在に必要なように，キリストの体（キリスト教徒）の存在にとって絶対的に必要である。第三に，この愛は，神性であり，霊的である；無償で，積極的で，強く，大胆，永久的である（free, active, strong, courageous, permanent）・・・第四に，この愛は，この愛によって愛されている者の愛と幸福を信じている。

というのは，この神からの愛（grace）の性質，効用，卓越性についてのこれらの真実について十分で確かな知識は，主イエスのこの美しい体と成る全ての人たちに十分な満足を与え，聖霊が記録してきたことだが，［I Corinthians 13］祈り，瞑想することや，この愛の格別の影響力を絶えず実行することで，その人たちの心に働きかけ，遂にはキリストが彼等の内に形成され，そして彼等がキリストの内に宿り，全ての人がこの愛の絆によってお互いに結ばれるのである。』

ここまで『その理由』の前段は，「愛の定義」，特に「愛は完全をもたらす絆である」（Love is the bond of the perfection.）が繰り返し強調される，そして後段は，このキリスト教の愛の概念が，これから建設されようとしている共同体に如何に適用されるかについて述べるが，特にピューリタンがキリスト教徒の模範となる都市を建設するのであるという部分は，Winthropの理想主義を示す有名な個所である。

『この説教を，現在我々が抱えている計画に適用すると，四つの事が提起される。一人間（the persons），二仕事（the work），三目的（the end），四手段（the means）である。

第一，人間について。我々は，共にキリストを信じる人間同志であることを公言する集団である。お互いに遠く離れていても，我々は，お互いにこの愛の絆によって一つに結ばれ，この愛を発揮して暮らしていくと考えるべきである。・・・

第二，我々が抱えている仕事について。格別の至高の価値ある神慮とキリストの諸教会の認可によって，行政上も教会に関しても正当な形態の政治のもとで，共存と協調の場所を求めることは，相互の同意によるものである。・・・

第三，目的は，主（the Lord）により一層奉仕するために，我々の生活を向上させることである。我々が一員であるキリストを信仰する集団の慰安と増大のためであり，我々や，我々の子孫がこの悪の世界の腐敗から守られ，主（the Lord）に奉仕し，神の定めによる力と聖潔のもとで我々の救済を得ることである。

第四，手段について。この手段には，二面がある。働きと我々が目指す目的の一致である。これらのことは並大抵のことではない，それ故に，我々は，普通の手段で満足してはいけない。我々は，英国ですべきであった事を行くところでしなければいけない。英国の教会で，告白においてのみ真実として支持していることを，我々は，よく知られたいつも行う習慣としなければならない。我々は偽装しないで，兄弟のように愛さねばならない。お互いを純粋な心で愛さなければならない。他人の重荷を背負わなければならない。自分のことだけでなく，仲間の事にも目を向けなければいけない，そして，神が我々の手による失敗に，我々以外の者の時と同様に，耐えると思ってはいけない。・・・神は，イスラエルの民に言われている，「地上のすべての家族のうちで，お前たちだけを私は知っている，それ故，お前たちの破戒には，罰を与える。」・・・

かくして，神と我々の間には，大義が存在する。我々は，この仕事を成し遂げるのに，神と契約したのである（We are entered into covenant with him for this work.）。・・・今もし主が，

我々の声を喜んで聞かれ，我々を我らが望む土地に平和に導かれるなら，神は，この契約を承認され，我々の使命を保証され，その使命に在る為すべき事柄の厳しい遂行を期待されるであろう。しかしもし，我々が，為すべきことに従わなければ，主は，我々に対して怒りを顕にされ，その様な，偽誓をした人間に報復され，我々に神との契約を破る代償がどのようなものかを教えられるのである。』

『この目的のために，我々はこの仕事を成し遂げるのに，一人の人間であるかのようにお互いに緊密に結びついていなければならない。我々は，兄弟のような愛情でお互いを慰めなければならない，我々は，他人の窮乏を補うために，我々の持つ余分なものを喜んで割かねばならない。我々は，親しい交際を，柔和に，優しく，忍耐強くそして公平無私に維持しなければならない。我々は，お互いを喜びとし，他人の状態を自分の事とし，共に喜び，共に悲しみ，共に働き苦しみ，常に眼前に，この仕事における我々の神に委任された使命と共同体，同一体の構成員としての共同体を置かねばならない。そうして，我々は，平和の絆によって，精神の統一を維持しなければならない。主は我らの主であり，我らを主の民とし我らの中に住み給い，我々の行くところ何処においても，祝福を与えて下さる，それ故に，我々は以前に知っていたよりも，より大いなる神の英知，力，善きこと，そして真実を知るであろう。我々は，十人の我々が，千人の敵に抵抗できる時，後に続く植民地を「神はそれをニューイングランドのようにされた」と言える賞賛と栄光を神が我々に与えられる時，イスラエルの神が我らの中に在られることを知るであろう。何故ならば，我々は，「山の上に在る町」になると考えなければならないからです。（We must consider that we shall be a city on a hill.）[Matthew 5:14-15]・・・』

この『キリスト教徒の愛の模範』は，『愛』の定義と，共同体を建設する基本的理念から構成されていることが分かる。『愛』は，共同体を組織する個々の人間の靭帯であり，これが働きを完全にする。従って，この愛なくしては，いかなるキリスト教徒理想の共同体もその存在は有り得ないとして，『愛は完全をもたらす絆である』ことを繰り返し強調している。「愛は現実のものであって，想像上のものではない」と説くウィンスロップは，新大陸でこれから出会うであろう多くの困難は，全てこのキリスト教徒の愛の欠如に原因することを洞察していたと言えるのである。共同体の基本理念に関する部分は，後世に，多くの歴史学者や社会学者達が，神権政治（theocracy）と定義した政治行政の基本的理念を含んでいる。

第一に，『この共同体はキリストを信じることを公言する集団である，つまり，信仰告白がこの集団（つまりは教会）の一員である資格であること。』1636年頃には，この再生の恩恵の経験を語ることを，成人教会員を得る必要条件とした。

第二に，『相互の同意によって，行政的にも，教会に関しても正当な形態の政府のもとで協調し共存すること。』1630年の6月にSalemに到着し，Charles川の河口Bostonに移動して本拠を構え，8月には，総督ウィンスロップ，副総督トーマスダドレイと七名の補佐官（assistants）が，政府の果たすべき仕事を始めている。そして10月23日の全体集会で，全員の投票や挙手によって，マサチュウセッツ湾植民会社の株主だけではなくて，植民地の自由民（freeman）12名

が，補佐官を選ぶ権利を与えられ，この補佐官が総督，副総督を選ぶことが決定されている。次の全体集会で，116名の新移住者がこの自由民に加えられ，1632年には，自由民は，総督，副総督を直接選挙する資格を与えられている。総督や自由民は，聖書（God Word）や一時的な緊急事態が必要とする法律を立法化したのである。そして，選挙権を持つのは，教会員のみであった。

第三に，目的として，『主により一層奉仕するために，我々の生活を向上させることである。我々が構成する集団に慰安をもたらし，集団を増大させることである。・・・』

ここでは，生活を向上させ，集団に慰安（comfort）をもたらすというのは，また集団を増大させるというのは，明らかに，勤勉に働き，生活を物質的にも充足させ，共同体全体の繁栄を目指す意味が込められている。後世に前資本主義と言われる傾向の発端である。

第四に，『我々の働きと目的の一致である。これは，並大抵のことではない。・・・我々と神との間に大義（cause）が在る。我々は，この仕事を成し遂げるのに，神と契約したのである。(We entered into a covenant with him for this work.）・・・神が期待する，為すべきことの厳しい遂行を怠るならば，神は怒りを顕にされ，偽誓をした人間に報復され，神との契約を破る代償が如何なるものかを教えられるのである。』

これから，聖徒のみによる共同体を建設することが，いかに難事業であるかを認識しているが故に，この事業は神との契約のもとで遂行されねばならないと説いたのである。

『キリスト教の愛の模範』は，キリスト教徒の実践すべき愛の模範と，それによって築くべき聖徒の共同体の基本理念について，平信徒であるウィンスロップがアーベラ号で行った説教である。聖書に基づく指導原理を，熱情を込めて説く言葉に耳を傾けるピューリタン移住者達は，新大陸を目前にしていかなる感慨を抱いていたであろうか。

Emory Elliott, University of California, Riversideは，次のように述べている。『英国を離れる時，ウィンスロップや彼を指導者とする集団が，神聖な使命（a sacred errand）に乗り出すことをすでに考えていたかどうかについては学者の意見は一致していない。ある学者たちは，ピューリタン達は，十分に発達した神学を持って新大陸に到着し，ピューリタンの聖職者達は，彼らの状況に聖書の記述が類似している多くの点を入念に仕立て上げるために予表論（typology）を利用したと主張する。

またある学者たちは，ウィンスロップは，持ち合わせの説教に使う修辞的技巧を用いたのであって，神に定められたアメリカの運命というような概念は持っていなかったと主張している。

このような解釈上の問題で見失われようとしているのは，「アメリカの存在の本質性」とでも呼ばれてきたものの創設（the very foundation of what has been called American identity）である。

これら英国人のアメリカ建国の「父祖」達についての一つの姿は，ウィンスロップや彼の同僚達は，この世の中の物質的なものを否定しているにもかかわらず，実際には，暴力的征服，抑制のきかない帝国主義，そして独善的で妄執的な国家主義へとつながって行く，神に支えられている物質的進歩の過程を進行させようとしている，初期のアメリカの前資本主義者達

(precapitalists) である。対極にあるもう一つは，腐敗した現代の世界を逃れて，神聖なユートピア的避難所へ努力しながら進もうとする敬虔な人達の姿である。そして，ウィンスロップに同行した人達は，原初的な中世の隠退所 (a primitive medieval retreat) を求めていたのであるから，ウィンスロップの「山の上に在る都市」(a city on a hill) という表現はこの避難所には不適切であった。

このように描かれる二つの姿のいずれが，アングロ・ヨーロッパ的北アメリカの進展をよりよく描いているかの議論では，歴史家や文学者は，両極に分かれている。多分唯一の解決法は，両方の姿とも幾分正確なものとして受け入れ，ウィンスロップの使命を，概念的にはユートピア的であるが，その使命が，拡大主義の言語と完璧主義という目的論に依存しているが故に，必然的に欠陥を帯びているというものであろう。

ウィンスロップの文章は，彼と共に新大陸へ渡ったピューリタン達にとって，絶えざる混乱と争いの根源となる一種の逆説を表現していたのである。即ち，聖徒達は，この世の誘惑を拒否しなければいけないが，しかし現世の職業には勤勉に励み，それが物質的な成功を収め，それが今度は，共同体の道徳的完全性と精神的完璧さを危うくするというパラドックスである。』[6)]

ウィンスロップの説教のなかに，既にこの共同体が抱える矛盾を予知させるものが込められているという解釈は，当然のことながら後世の人間が，共同体の歴史的進展を現代から眺めて初めて可能なことではある。マサチュウセッツ湾植民地が直面したインディアンとの戦い，政治的危機，経済不況，外交的問題などさまざまな難事や，宗教的にも信仰告白が教会員の資格から外され，英国教会がBostonにも創設されるという事態は，1600年代の終わりには，ウィンスロップが理想とした神聖共同体を弱体化する。しかしながらウィンスロップの『神との契約による建国』の精神は，現代に至るまで，政治的，経済的進展の中を貫いており，またアメリカ文化の特質の基盤であり，アメリカの存在の本質として認識されているものである。

5．ウィンスロップの『キリスト教徒の経験』(Christian Experience)

Puritan Personal Writings:Autobiographies and Other Writings (A Library of American Puritan Writings, The Seventeen Century Series, editor:Sacvan Bercovitch) の中にウィンスロップのChristian Experienceと題された内省録がある。Winthrop Papersとしてまとめられている日記や記録の一部と思われる。ピューリタンの神聖共同体を建設する宗教的理念を，『キリスト教徒の愛の模範』の中で説教したウィンスロップがどのようにしてキリスト教信仰の道程を歩んだかを，極めて内省的に，赤裸々に書き記したものとして意味深い。この記録の末尾に，“The 12th of the 11th month, 1636, in the 49th year of my age just complete.” と記されているのを見ると，五十歳を迎え ようとして，自らの人生の精神的軌跡を辿り，改めて主イエス・キリストへの帰依を告白したものと読めるのである。このtextに付けられた頭注には，『これはBaxterやBunyanの信仰書或は，Confessions of St.Augustineの持つ魅力を具えている』と記されている。『ウィンスロップの宗教的背景』で触れたように，カルビン神学を基礎とするピューリタンは，常に自己

妄想の恐れや，自己欺瞞，罪，偽善等に対する心理的探りを怠らなかった。Perry Millerは，The New England Mindで『何百という日記や，何千という説教が残されているが，その内面的意味は，「聖アウグスティヌスの告白」の中に読み取ることができる』と述べている。

『キリスト教徒の経験』[7]は，十一節から構成されているので，各節を抄訳し，幾分の考察を付して読み進めていくことにする。

「第一節」『14歳の頃，ケンブリッジ（トリニテイ・カレッジ）にいて，熱がなかなか去ろうとしないことがあって，生きる楽しみが失せてしまった。カレッジで，誰にも顧みられず嫌われて，一人悲しい気持ちで過していた。若者の喜びを奪われ，私は，完全で慈愛深く，そのもとへ寄るものを誰でも，特に私のように若い者は迎えて下さる，だから私は資格があると信じていた神に従ったのである。そして，神に近付くことに喜びを抱いたのである。私は，私の多くの罪がいかに私の心に影響を与えたか，或は，キリストについてどんな考えを抱いたかは記憶していないが，私は，心から進んで神を愛し，それ故に神は私を愛して下さると思った。

しかし，健康をすっかり回復すると，そして神以外に喜びを見出すものを見つけると，以前の神との親しみを忘れ，そして前からあった肉欲（lusts）に負けて，一層ひどい人間になってしまったのである。

しかし時には良い気分であっても，すぐに生来の良心（my naturall conscience）に厳しく阻止されるのであった。この良心によって，神は私を汚らわしい罪（foule sins）から守って下さったのであって，神がそうされなければ，私はそれらの罪に堕ちていたであろう。しかし，私の肉欲は非常に巧妙で，私にいかがわしいことをさせたり，そうでなければ，私に普通の義務をさせないのであった。私の肉欲に満ちた気持ちを満足させる方法以外のことには，関心がなかったからである。』[8]

思春期にあったウィンスロップが，病弱の故に神に慰めを求めたが，健康を回復すると，肉欲に負けて罪深いことをしてしまうという赤裸々な告白は，アウグスティヌスの『告白』にある，カルタゴ留学の時の一人の女性との出会いの事件を連想させるものがある。人間の内面に潜む罪深さを抑制する良心（conscience）は，神によって人間の心に刻まれた神の法（law）であると説くカルビンの影響が，当然のことながら読み取れる。そしてまた，人間の理性は，聖書の戒めを道徳的，倫理的問題に適用する力を神によって与えられているという英国教会の信念でもある。「良心，即ち神の働き」は，『キリスト教徒の愛の模範』を読んでも判るように，カルビンの教義に忠実なウィンスロップの，一貫して終生変わらない宗教信念であったと思われる。

「第二節」『十八才の頃，結婚をして家庭を持ち，カルバーウェル（Culverwell）牧師の教区で，エセックスで暮らすようになった。そこに住んでいる時，時折，牧師が伝える神のその言葉が力強く心に迫るのを初めて知ったのである。その後，他の多くの言葉を聞いた時も同じような経験をした。そして，私自身の内に，自分で覚る，そして他人も気付く変化が生じ始めたのである。今や，良心の強い働きに支配されるようになったのである。最早，宗教をもてあそ

ぶことはできないと思った。神は，私の魂に厳しい課題を与えられることがあったが，それでも，肉体がそれを振るい落とし，それを物ともしなくなるのであった。私が喜んで受け入れたくなるような，神からの楽しい誘いを受けることがあったが，肉体的関心は 消えなかったのである。慈愛深い主にこうして答えなかったが，私の頑固さと，神の愛に対するつれない拒否にもかかわらず，神は，私の心を圧倒し神に従わせ，この現世の全てを捨てさせ，主よ，あなたは私に何をさせようとされるのですか？と私の心が神に答えたのである。』[9)]

牧師の伝える神の言葉に心を動かされ，自他共に認める変化が生じた，回心の経験への過程が語られ始める。神が支配する魂と，これに頑なに抵抗し，神の愛を拒もうとする肉体の相克を経て，遂に，神が求めるものは何であるかを問うのである。このような回心の経験を人前で語ることが，神聖共同体を構成する聖徒の資格であったことから判るように，ピューリタン信仰の特色は，自らの内面を厳しく吟味し，神の働きを経験することであった。この精神的経験によって，次第に聖職者の道を歩もうとさえ思うようになるのである。

「第三節」『私は，神と，さまざまな神の働きに平和と慰めを見出すようになり，私の主な喜びは，そこに在り，私は，一人のキリスト教徒であり，その土台となるものを愛したのである。・・・

私は，神の言葉を求めて心に満たし切れない渇きを覚え，良い説教で，それが何マイル離れている所でも，特に心の中を深く探して良心に入り込むような良い説教は，逃すことはできなかった。

私は，他の人達を神に近付ける精神的努力をした。自分の魂を見ることを殆どしないで，現世の全てよりも良いと私が知っているものを見下している人達を眺めると，哀れと思ったのである。私の努力が成功すると，それは大きな励みになったのである。

こうした努力をする機会などによって，私は，宗教に関して次第に著名になっていき，さまざまな人が，良心の問題で助言を求めに来るようになった。そして，もし心の悩みを持つ人があると聞けば，慰めに行ったものである。このような精神的傾向と，私の努力の成功によって，私は，神学の研究（the study of Divinity）に没頭したのである，そして，もし友人達が私の進路を変えなかったならば，私は聖職者になることを意図していたのである。』[10)]

牧師の説教，特に良心を探る説教に感動して，自らも次第に良心の問題で他人に助言する立場に立つようになる。神学の研究に打ち込んだとあるように，法律家の道を歩みながらも，聖職者に劣らないと思われる神学上の知識を持っていたことが窺われる。

「第四節」『職業に就き，それによって信用を得ると，自分の能力を誇りに思い，以前よりは，もっと厳しく救いの証拠が期待できる仕事をしたい気持ちに駆られたのである。（以前に神が私に与えた大きな変化の故であるが）そして，立派な牧師達や他のキリスト教徒達の全体的な賞賛などで，私が善い状態にあることをそれほど疑問に思ったことはない。しかしながら，私だけが知る堕落や心の震えは，（非常に敬虔な人達の中にいる時，最も大きかったのであるが）そして，特に私の熱意や愛情が弱くなったと覚える時には，気持ちが落ち込んだものであ

る。そして，時折聖霊の保証による救いの確証のことを耳にしたり，それは神の言葉によって私も知ってはいるが，持つこともできないし，持てると敢えて言えもしないものである。又，パーキンズ氏（Mr. Perkins）の著作や他の書物を読んで，神に見放されている者（a reprobate）でも（表面上は）私が達した程度の状態に成れるのかもしれないと思ったり，その上，私の胸中に大きな空洞と虚しい誇りを見出すと，私は，段々と悲しくなり，どうしてよいか分からなくなり始めたのである。私は，恥ずかしくて私の問題を私を知る牧師に明らかにはできなかった。私が，私だけでなく，宗教をも辱めることだと思ったことは，他人からは優れた信仰告白をした人と言われている私が，自分自身に見出すような堕落を発見することや，最早，新しくやり直すのは手遅れの偽善者（hypocrite）であると判ること，そして，しばしば悔い改めをしてきたが，本当には悔い改めをしていないということであった。ヘブル人への手紙：4－6（Hebr:6）に記してあることを考えることは，私には地獄の様であった。・・・私は，次第に悲しくなり，憂鬱になったのである。・・・私は，私という人間の根本が健全でないのだと思いました，そして信仰の告白をやめて，私は偽善者（hypocrite）であると公言しようかと思ったことがある。しかし，こうした悩みは，一度に押し寄せてくるのではなく，散発的に生じるのであって，時には，祈りに心の清々しさを覚え，聖徒達に対する愛に快さを感じたものである。これは不十分な慰めであったが，主（the Lord）は，私を支えて下さり，心には関わりのない日常の事柄によって，これらの不安が私の思いから消えることも度々あったのである。私は，キリストによる無償の義化の教義（the Doctrine of Free Justification by Christ）をかなり以前から知っていて，それが私や他の人の魂に与えられるように切望したが，私の満足がいくようにキリストに近付くことができなかった。・・・』[11]

この節は，キリスト信仰者の不安と怖れを卒直に吐露した個所といえる。カルビンはRom.8:30を引いて，「結果として，神は自らの民を召され，義とされ，栄光を与えられる時，永遠の選びを宣言されているに過ぎない。この選びによって，これらの人々は生まれる以前に，神によって召されるべく運命づけられていたのである。それ故に，このように召され，義とされなかった者は，誰一人，栄光の神の王国（the Heavenly Kingdom）へ入れる者はいない。・・・」[12]と選ばれる人間（the elect）の予定運命を説き，さらにそれでは，実際に，選ばれた人間と，見放された人間はどういう人間であるかについて次のように述べている。

「選ばれた人間は，信仰の確かさによってそれと判るものではないが，聖書にはいくつかの確かな特徴が示されている，それによって，選ばれた人間（the elect）と神の子達（the children of God）と，神に見放された人間（the reprobate）と異邦人（the alien）を区別することができるかもしれない。・・・結果的に，我々と共に信仰告白，生活の実例，礼典（sacraments）への参加によって，同じ神（God）とキリストを信仰する人達は選ばれた人であると考えるべきである。・・・しかし，我々と同じ信仰に同意しない，或は，口先では，信仰の告白をするが，その行いによって口で信仰する神を否定する――丁度，生涯を通じ邪悪で自分を見失い，罪深い肉欲に酔いしれ，自らの邪悪さに全く無頓着であるような人達――こういう種類の人達はす

べて，その特性によって今は教会員ではないことを示している。」[13]

またカルビンは，偽善について，次のように定義している。「結果として，アダムから生まれた我々は全て，神を知らず，神を奪われた者であり，邪悪で，堕落し，全ての善きものを欠いている。人間の心は，特にあらゆる種類の悪を行う傾向があり，堕落した欲望に満ち，それに耽り，神に対して頑なである。[Jer.17:9] しかし，たとえ我々が，外面的に何か善いものを示したとしても，心は依然として堕落し，歪んだ邪悪な状態のままである。全ての者にとって，最重要な，いやむしろ関心を持つべきことは，神の裁きである，というのは，神は外面によって裁くのではなく，外面的な見事さを高く評価するのではなく，心の内にある秘密を凝視するからである。[ⅠSam.16:7; Jer.17:10] それ故に，人間が，いかに目が眩むような外面的聖性（however much of a dazzling appearance of holiness）を自分に着せても，それはただの偽善に過ぎない，そして神の目には不快なものでさえある，何故なら堕落し腐敗したさまざまな心のうちにある思いがその外面の下に潜んでいるからである。」[14]

「神に見放された者」とは，「偽善」とは，とたたみ掛けるように鋭く指摘するカルビンの言語は，いささかの信仰の緩みを許さない。さらにヘブル人への手紙６：４－６で，「一度光を受けて天からの賜物の味を知り，聖霊にあずかる者となり，神のすばらしいみことばと，後にやがて来る世の力とを味わったうえで，堕落してしまうならば，そういう人々をもう一度悔い改めに立ち返らせることはできません。彼らは，自分で神の子をもう一度十字架にかけて，恥辱を与える人たちだからです。」という個所を合わせて思い起こして，ウィンスロップは，地獄に落ちる恐怖を覚えたことを記しているが，ここで述べられていることはキリスト信仰の原点であり，Calvinismを核とするピューリタン信仰の本質でもある。ウィンスロップの極めて厳格な内面観照による信仰姿勢が示されている。

「第五節」『このような，そしてこれに似た悩みを抱えていると，しっかりして落ち着いた平安を得ることができなかったのである。そして平安を得ても病弱になるといつでも消えてしまうのであった。私は，神により接して歩き，全ての義務をより厳格に果たす以外に道はないと結論した。その結果，沢山の取るに足らない仕事に手を出し，多くの正当な慰安を拒んでいたが，それでも小さな出来事で，私の平安は崩れ，私は長い間，律法に縛られて暮らしたのである（罪を犯し，謙遜になる，そしてまた罪を犯し，恥ずかしく思う，という具合に日々を暮らしたのである）。しかしながら，聖化を得る力（strength to my Sanctification）をつけることもなく，私の信仰の明証（Evidence）を向上させることもできない。そして気晴らしもできなければ，世間の事柄に関わることもできず，律法に従う暮らしをしたのであるが，それは，私の心の平安を壊したくないがためであった。しかしこれもうまくはいかなかった。やがて，私は非常に憂鬱になっていき，私自身のさまざまな思いで疲れ果て，私の気分も荒廃したのである。』[15]

信仰を強め，平安を得ようとするが，前節から続いて，人間の本性である原罪の意識や，偽善，堕落への怖れなどから逃れることができないで，日々懊悩する姿が浮びあがって来る。

「第六節」『このような悲しむべき，あやふやな状態で暮らしていたが，その時，私の最も

悩みとしたのは，神の怒りに対する意識（the sense of God's wrath），或は，永遠の断罪の怖れ（fear of damnation）ではなくて，救いの確証の無さ（want of assurance of salvation）や，私のさまざまな堕落に抵抗する力の無さ（want of strength against my corruptions）であった。私に最も欠けているものは，キリストに対する信頼（fayth in Christ）であることは知っていた，そしてそうなれるものなら，キリストと喜んで結びついていたであろうが，私はそうできるほど自分が信心深くないと思ったのである。多くの場合，私は，聖書の祈りや瞑想の時に，キリストについて慰められる思いを抱いたが，それらの思いは私に満足を与えないで，自分の目に自分を卑しい人間に見せたのである。そして，善いことがやって来ると希望して絶えずあらゆる手段を使ったのである。時には，キリストは，私にキリストを求める強い欲望を与えていて，キリストの世には，私を満足させて下さると確信することがあった。時にはまた，私の努力や祈りはこれ以上は何の効力もないという心秘かな思いを抱くこともあった。しかしそんな思いは直に抑えられたのである：即ち，私は，私の心が依然として，進んで神を正当化しているのが判ったのである。そうです。私は，仮令（タトエ）神に捨てられても，神を愛すべきであると確信したのである。』[16)]

信仰による救いの確証の無さ，律法に背く堕落に抵抗する力の無さ，更には，キリストに対する信頼の無さ。前節に続いて依然として，信仰と不信，確証と懐疑，聖化と堕落の狭間に在って苦悩が続く。しかし，最後に光がさすのである。「神，我を捨てるとも，我は神を愛す」という信仰の極致が訪れる。第四節から第六節までの信仰上の苦悩は，この最後の一言で解消され始めていく。

「第七節」『このような状態にあって，家族で聖書を読むうちに，恩恵の契約（the Covenant of grace）と業の契約（the Covenant of works）の差異が明白になったのは，神の喜び給うことであった。この恩恵の契約は，次第に大きな印象を私に与え始め，そして私は十分にそれを得ていると思った：代償なしにキリストが得られる，そして，無償で義認されること（To have Christ freely, and to be justified freely）は，私にとって大変に気持ちの良いものであった；そして，正当な理由で（と私は考えたが）自信が有ってではないが，そのことは私に保証されていたのである。しかし私は，折にふれてこれまでより精神的な警戒が疎かになり，私の話の中でも余裕が出てきたのである。』[17)]

ピューリタンの契約神学（covenant theology）の核心は，予定運命の神意は，福音に示される摂理によって神がアブラハムの子孫との間で恩恵の契約（covenant of grace）を確立したということである。アブラハムがしたように，人間は神と契約を結ぶことができるが，勿論この神との約束の出会いは，神の主導（the divine initiative）であるから，恩恵の賜物（a gift of grace）なのである。人間との贖罪の契約（the Covenant of redemption）によって，神は，神の子キリストと契約を結ばれたのである。

人間と神との契約は，信仰によって，一人ひとりが同じ内容で与えるべきものとされたのである。

一方，業の契約（covenant of works）は，人間が信仰によって義認され（justified），救い（salvation）を受けるとするならば，神の選びは，聖化（sanctification）即ち善を行うことによって証拠づけられなければならない。聖化を義認の証拠として用いることによって，人間の行為をキリストに対する関心の程度と結びつけたのである。善を望む，目には見えない能力を目に見えるものにすることが，神と人間の業の契約とされたのである。業の契約と恩恵の契約の二つの契約とその差異は，やがて業の契約を否定するハッチンスン夫人（Mrs.Hutchinson）が引き起こす律法不要論争（Antinomian Controversy）へと発展し，遂には，ウィンスロップや牧師，行政官と，ハッチンスン夫人の裁判での対決，後者の追放という一大事件となる。

「第八節」『私は，今や三十才になろうとしていた。長い間望んでいた，しかし無償の恩恵の契約のことをだんだんとはっきり理解するようになってからはそれ程ではなかったが，キリストが私に内に現れるであろう時が来たのである。それ故に，先ずキリストは私にひどい苦しみを与え，それによってこれまでになく私の目に私が卑しい人間であることを分からせ，そして私の全ての才能や部分が空虚なものであることを示されたのである；私に力も意志も与えず，私は，まるで乳離れした幼児になったのである。私は，もう過去の自分や過去にしたことに目を向けることも，堕落に抵抗する力や救いの確証が無いことに不満を抱かなかった。イエス・キリストによる無償の慈愛（free mercy）にただ目を向けていたからである。私のような哀れな下劣な人間に対して与えられる無償の慈愛のことを思うとただ嘆き泣けるだけであった。それから，キリストは，私は汝の救いなりという言葉によって，私が考えるあらゆる約束を示して下さったのである。今や，私の魂はキリストに近付き，そこで快い満足な気持ちで安らぐことができた，そしてその愛にうっとりとして何も望むものも無く，恐れるものは無く，口では言い表せない，輝かしい喜びと，キリストを受け入れる新しい関係に入った精神で満ちたのである。それは，以前時にはしていたより熱心に，或は心を広くして祈ることができるからではなくて，今は，以前にまして確信を持って，わが父キリストに叫ぶことができるからであった。私が思うに，この状態と，以前に抱いていた心の状態は，前者に関しては，ソロモンの治世の様で，自由で平安であり，豊かで，栄光に満ち，後者は，エイハブの治世で，苦難や恐れそして卑下に満ちていた。このようにして，神の聖霊に親しめばそれだけ一層私のさまざまな堕落は克服され，新しい人間になるのが早まるのであった。世間，肉体，そしてサタンは，しばらく沈黙し，それらのことは耳には入らなかった：しかしそれらがそんなに容易には私から去ることはなかった。こうした状態はかなり（数か月）続いたが，常に同じようであるとは限らなかった。然し私の慰めや喜びがしばらくは弱まる時があっても，私の平安は続いたし，平安が戻る時は前よりは強かったものである。私は，今や主イエス・キリストにすっかり親しみ，キリストはしばしば私を愛すると言われ，私は疑いもなく，イエスを信じたのである；私が外に出れば，イエスも共にあり，家に帰る時は私と共に帰られるのであった。私は，道を行く時イエスと語らい，私と共に床に臥し，何時も共に目覚めたのである。今は，どんな人達の中へでも入って行け，イエスを失うことはなかったのである：そして，キリストの愛は，非常に甘

美であったので，私は，天上であれ，地上であれ，イエス・キリスト以外のものは何も望まなかった。』[18)]

長い年月の信仰をめぐる苦悩の後で，不信も疑いも消えて，常にイエス・キリストと共に在る喜びが謳われている。これがまさに回心の境地なのであろうか。この節は，神に見放された者ではないか，自分の信仰は偽善ではないか，ヘブル人への手紙：4－6を読み，地獄の苦しみを味わった苦しみを記した第四節から第六節とは対照的に，この信仰告白全体の頂点となっている。特に「我は汝の救いなり」(I am thy salvation）と言うキリストの言葉を聞いた以後の文章は，キリストへの信頼に満ちていて，キリストの愛を賛美する滑らかで快い言語とリズムに満ちている。

「第九節」『・・・私のこの世の事柄に対する愛着が，キリストから心を奪い，キリストの愛に満ちた顔が私から遠ざかることがあったが，そんな状態にあっても，キリストが長く私から離れていることはなかった。ある言葉，痛みで，或は祈りや黙考のなかで私を呼び戻して下さるのであった。その時は，私は，夢から覚めた人間，或はまるで今まで別人であったかのように思えるのであった。そして，その時心にかかる事は，神に対して，そして神の無償の豊かな慈愛に対して忘恩であったことを悲しい思いであった。このことを考えると私の心はいっそう張り裂けるようで，断罪の恐れ，或はいかなる苦しみよりも，私の目に涙させるのであった。今日まで何度となく，イエス・キリストへの思いや，私に与えられた無償の恩恵は私の心を和らげるのである。』[19)]

「第十節」『この頃から，私は，肉（flesh）と霊（spirit）との絶えざる相克を経験していた。時には，サタン自身が，私を堕落（falls）させることがあり，これは最近は以前より分かるのであるが，その時も，主から離れることはしなかった。しかし，何かの突然の危険か恐ろしい誘惑によって堕落した時，主の善き聖霊は私を必ず見守り，私に慰めを与え，窮地にある時勇気を与えたのである。私が普通に陥る堕落は，何もその気になれないこと（dead heartedness)，や無礼（presumptuousness）で，サタンは，それを利用して私に更に他の罪を犯させるのであった。肉が霊に勝つ時は，霊は引っ込み，非常に痛んで，なすべき働きが，識別できないように思える。然しながら，最悪の時でも，私の霊は，喜んで働き，声には出さないが，私の信仰が全然弱くなった訳ではないと私を支持してくれたのである。』[20)]

＊肉と霊の相克は，アダムの堕罪以来人間が逃れることのできない宿命であり，ガラテヤ5:19-26に，肉の行いと御霊の働きについて記されているが，ウィンスロップは，この記述を特に意識していたのであろうか，その苦しみの中で，主の見守りによって慰められ勇気を与えられることを喜び，仮令，罪を犯した最悪の時でも，信仰は決して弱まることはないという確固とした信念を述べている。それにしても，肉の行いに対する厳しい戒め（不品行，汚れ，好色，偶像礼拝，魔術，敵意，争い，そねみ，憤り，党派心，分裂，分派，妬み，酩酊，遊興，といった類――ガラテヤ5:19-21）が，他者や集団全体に要求されるならば，そこには，極めて緊張した人間関係が生じていたであろうし，人間の精神的，肉体的自由を必要以上に束縛し，不寛

容な体制が生じたことは想像できるのである。

「第十一節」『無償の義化（free justification）という教義を最近こちらで教えられたが，それは，（私の記憶では）過去二十年の間そうであった様に，私をもの憂い状態にした。（そして私が恐れるに）まるで仕事の総てが新しく始まろうとしているように，私を昔のように卑屈にしたのである。しかし，平安の声が聞こえた時，この無償の義認は，以前に知っていたのと同じであると分かったのである。もっとも，そんなに高らかでも，また時折感じていた程の喜びを与えるものではなかったが。ただ一つ私に分かったことは，私はこの無償の義認によって，わが主イエスの聖なる白衣を汚したということである。主イエス・キリストの豊かさと無償の恩恵を軽視し，そして，自分の中に金や銀でできた偶像を立てることを義とするという教義は，主イエスの神聖を汚したのである。そしてもう一つの聖化（Sanctification）の衣を，神の民なら気付く多くの汚点で汚したことである。しかし内面の汚れは，聖衣に付けた汚点より汚いものであった。主イエスは，（ご自身の無償の恩恵によって）私の魂を永遠の契約の血によって洗って下さってきたが，イエスの世には，それら全ての汚点をも洗って下さる。アーメン，主イエスは，そうして下さるのである。　ジョン・ウィンスロップ

1636年，第十一月の第十二日，我が人生の四十九年目が終わる。』[21)]

最後の節での，無償の義認についての新しい教えに，いささか釈然としないで，それがイエスの無償の恩恵を軽視し，イエスの神聖を汚すとまで言うが，これは，恐らくジョン・コットン（John Cotton）の説く教義，即ち，教会全体（偽善者をも含め）に与えられる神の恩恵（federal grace），更には，ジョン・コットンの後を追ってニューイングランドへやって来たハッチンスン夫人が主張する業の契約の否定が影響しているものと考えられる。

ハッチンスン夫人は，善き行い，即ち聖化が，神の恩恵のしるしとしての内面的変化であり，それによって神の選びが証拠づけられなければならないという説に反対し，業の契約を否定したのである。

ウィンスロップの立場は，「キリスト教徒の愛の模範」で明確に宣言されているように，義認と聖化，恩恵の契約と業の契約，はそれぞれ一対のものであり，特に『愛は神から出ているものであり，愛の影響力を実行すること，すなわち信仰の証しとしての善き行いをする，即ち見える聖徒であることが，神聖共同体の構成員の条件であるというものであった。従って，無償の義認，恩恵の契約のみを主張することは，神聖共同体を完全にする聖書に基づく法と秩序を破壊するものであり，信仰上から言えば，それは，自らの内に偶像を建て，主イエス・キリストの神聖を汚すことなのである。

しかし最後に，ウィンスロップは，イエスは，そうした汚点，聖書の歪んだ解釈を洗い流して下さる，と主イエス・キリストに全てを委ねることで結ぶ。

6．結び

『キリスト教徒の愛の模範』で示された高邁なピューリタン精神と目的，そしてまた，『キ

リスト教徒の経験』で告白される信仰が，ウィンスロップを取り巻く人間社会のなかで，現実的にはいかに応用され，目指すべき神聖共同体のなかで人々はどのように日々を過ごしていったのかは，さまざまな資料によって明らかであるが，現実に展開する新大陸での現実は，ウィンスロップの理想に，むしろ不断の抵抗を示したと言ってよい。いやむしろ，ウィンスロップは，人間の持つ生来の堕落性に厳しく挑戦したという方が正しいであろう。アリステア・クック（Alistair Cooke）は，ジャーナリストらしい洞察力にユーモアを交えて，次のようにピューリタン社会の現実を浮かび上がらせている。『今日，ふり返って見ると，マサチュウセッツの政治形態には，共産主義国家，ないしは全体主義国家と著しく類似した面があると言わざるを得ない。政権を掌握する唯一の政党は，一人一人の市民を寛大に取り扱いはするものの，党員でない限り政治的発言は与えられない。国民的基盤によって下から支えられている社会で，生活は生き生きしており，熱がこもっているが，市民の同意によって支えられているのではなく，上からの厳しい統制によって秩序が維持されているのである。支配者は，労働や礼拝をはじめ，娯楽，企業，文学から道徳に至るまで，社会のあらゆる権能を支配している。マサチュウセッツでは，『旧約聖書』から，任意に抜き出された文言に指導者ウィンスロップの思想を加味した訓戒によって，統制は更に厳格になった。「汝，夜に備えて働くべし」，「汝が必要とするものはすべて汝の手で造り出すべし」，「良き種を播け，主は神の時至れば稔りもて嘉し給うべし」「神の法によりて若きを叱れ，心より神を崇めんためである」等である。個人の行動を規制する法律も実に厳しかった。わずかでも他人のものを盗んだり，淫らな歌を歌ったり，酔っぱらったりすれば，すぐ牢獄行きだった。教会の近くで軽口を叩いただけでさらし台にかけられ，姦通は死罪であった。・・・』[22]

唯物主義の共産体制と唯神主義の神聖共同体を比較するのは，似て非なるものを比べる危険を感じさせるが，ウィンスロップの『キリスト教徒の経験』,『キリスト教徒の愛の模範』に目を通すなら，人間の内面に対する『聖書』による要求がいかに厳しいものであったかは，容易に理解できることではある。

ウィンスロップの死後十年も経たない1657年に，Half-Way Covenant（中間契約）が承認され，1662年には，救いの恩恵を受けているという告白がなくても，洗礼を受けている者は，子供に洗礼を受けさせて，神との契約に入らせることを教会会議で決議している。1679年，インクリースマザーが召集した教会会議では，「ニューイングランドの教会において，多くの信仰告白者の間で，敬虔から来る力が目に見えて大きく衰退している」という記録がある。

1690年頃には，新特許状に記された教会権力のさまざまな制限，企業家精神に満ち，実利を重んじる商人階級が台頭してきて，政治的にも，教会に対しても発言力を強めてくる。

1690年，コトンマザーは，『ニューイングランドの住民が抱くべき公共精神』という説教をボストンの教会で行った。ピューリタン共同体が設立されて以来，経験の無い試練の時にあたって，許しがたい堕落と背教を伴う風俗の退廃が余りに多くの人たちの間に見られる。・・・もし速やかに，神の怒りを引き起こすような悪行を改めなければ我々は，直に滅びるであろう

と説き，集会の命令を伝達する。それは，ウィンスロップが，『キリスト教徒の愛の模範』で謳いあげた高邁な愛の定義では最早なく，地上の人間が繰り広げる醜い，悪の所業を戒めるものになっている。やがて，この危機感が悪魔や魔女の実在，神聖共同体を破壊させようとしている悪魔の陰謀説と結びついて，魔女裁判の進行を早め，多くの魔女妄想による犠牲者を生むことになり，この事件はピューリタン指導者の名誉と権威を失墜させ，次第に神聖共同体は瓦解するのである。

ウィンスロップが，同行した聖徒達と共に全員が協力して友愛を発揮し，神との契約によって理想の共同体を築こうとしていた夢は，次第に色あせて，冷たい現実に変わるのである。森羅万象全てが神慮によるものとするピューリタンの身からすれば，ウィンスロップは，目の当たりに展開する事態の進展に，ただ神の御名を崇め祈ることしかなかったであろう。ウィンスロップは，総督として渡航して以来，十二回も選ばれ，日の出一時間前に起き，真夜中に床に就くのを常にし，指導者としての仕事に励み，1649年に，執務中に倒れたということである。ウィンスロップが書き残したものに目を通してみれば，彼がアメリカの歴史を通して，稀有の指導者であったことは自明である。

参照・引用文献

1）The Cambridge History of American Literature, Vol.1, p.189
2）ibid., pp.186-187
3）The Puritans In America– A Narrative Anthology, Heimert and Elbanco Harvard, pp.71-74
4）ibid., pp.70-71
5）ibid., pp.82-92
6）The Cambridge History of American Literature, Vol.1, pp.194-195
7）A Library of American Puritan Writings, The Seventeenth Century, Vol.8, John Winthrop's Christian Experience, pp.152-161
8）ibid., p.155
9）ibid., pp.155-156
10）ibid., p.156
11）ibid., pp.156-157
12）Calvin Institutes of the Christian Religion: Battles 1536, pp.58-59
13）ibid., pp.60-61
14）ibid., p.16
15）John Winthrop's Christian Experience, pp.157-158
16）ibid., p.158
17）ibid., p.158
18）ibid., pp.158-159
19）ibid., pp.159-160
20）ibid., p.160
21）ibid., pp.160-161
22）NHK BOOKS, アリステア・クックのアメリカ史（上），pp.122-123

On Puritanism in New England
John Winthrop's Christian Experience (1636)

Masao OKAMOTO
Faculty of College of Liberal Arts and Science,
Kurashiki University of Science and the Arts,
2640 Nishinoura, Tsurajima-cho, Kurashiki-shi, Okayama 712, Japan
(Received September 30, 1996)

John Winthrop (1588-1649) had been the governor of Massachusettes Bay colony from the time when it started to settle in New England to 1649 when he died in his office. His reputation as a pious and devout Puritan as well as an exceptional leader at the time has been established in the history of New England.

In this paper, the writer took up his record of cofession as a Christian, with reference to his letter telling his friends and relatives the reason for moving to New England, and his sermon on the Arbella to his colleague, in order to trace his confession of faith in God as a key to appreciate his language and activities throughout his life.